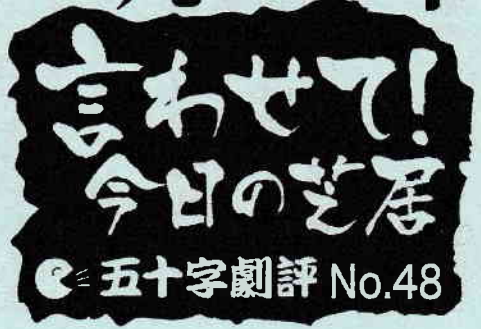


# 一九一一年

劇団  
チョコレートキ



▼重苦しい時代背景。真実がねじ曲げられた裁判。残酷な尋問。映画などで度々見てきたこの時代。「一九一一年」というタイトルからどのような演劇になるのかわかりませんが、台本、演出、役者さん一人一人の熱い演技に感動しまし

た。権力という力に抗うことができず飲み込まれていく人間の弱さ、葛藤、それでも誠実に生きたいという願望。村度や空気を読むという言動を求められる今の時代に自分がどう生きるのか問われた作品でした。

(女性)

▼初めて市民劇場を鑑賞しました。商業演劇と違う、テレビやユーチューブとも違うお芝居を続けて行ってください。

(男性)

▼デイズ二一の映画のようにハッピーな気持ちにはなれないけど見てよかった。知らぬが仏という言葉はあるが現実と受け止められる人間になりたいと思ひ直しました。素晴らしい劇に感動です。

(女性)

## 【六〇代】

▼主演の田原巧を演じた西尾友樹は凄と思う。上手い役者という表現をよく使うが、今回の演技はその次元を超えたもので、日々の葛藤の中で日に日に憔悴し弱っていく様がよく分かり、

観ているこちらが「大丈夫だろうか」と心配してしまいう程で、田原巧の役柄に成りきっていたと思う。菅野須賀子を演じた堀奈津美も凛として、とても存在感があった。他の出演者も皆上手いなと思う。古川健の脚本も良く、せりふの一つ一つが心に響いた。講演会の話の内容が、舞台上でその通りに展開されており、まさに看板に偽りなし。登場人物一人一人の心の中の葛藤が良く表現されていたし、観ている自分に良く伝わってきた。また、芝居づくり

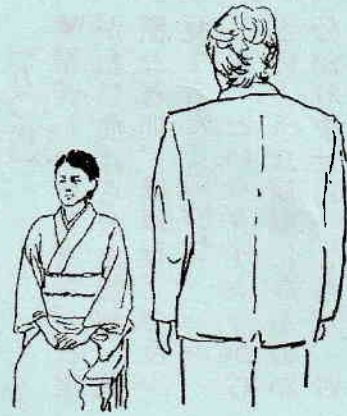
のコンセプトについても話していたが、「私はこう考えます」・「ご覧になるあなたはどう考えますか」ということが、舞台から問いかけられていたと思う。二時間十五分の上演時間の間、舞台と真正面から真剣に向き合えた。素晴らしいと思う。劇団チョコレートキの他の作品も、近い将来ぜひ観てみたい。

(男性)

▼堀さんの演技に感動しました。また権力の恐ろしさを目の当たりで教えてくれる作品で多数の方に観てほしい。

(女性)

▼中々重い内容でしたが、今の私たちの生活が自由に生きられていることに感謝しなければと思ひました。



▼直球で心にきました。期待以上のお芝居でした。今目的で、現代を見ているようです！集中した二時間十五分！  
(女性)

▼自由。権力。国家。法。裁判。わずか百十年前の、日本という国家の事実。そして今、日本の現実、自分自身は。  
(女性)

▼明治時代に起こった事件

だが、最近ではなにか身近に起こりうるように感じた。陰謀によつて無実の人々が死刑になる。正義や個人の善意も無責任な権力の圧力につぶされていく、裁く側の判事の苦しみ。恐ろしいことだ。出演者が男性ばかりのなか、菅野須賀子が「自由」について語るのが印象的だった。  
(女性)

▼今も昔もでつちあげ事件は相変わらず多くて、私の様な力のない人間は、ひとたまりもなく潰されるんだろうなあと恐怖を感じました。弱さだけではなく強さも表現された演出は、観ごたえがありました。(女性)

【七〇代】

▼百十年前の出来事が今もくり返されている気がする。うまく時流に乗った人、ずつ

と心を乱され生き続ける人。色々な人間模様を見ることのでき、たいへん良い芝居でした。  
(男性)

▼二回続けて美女を観た。今日堀奈津美さんと、前回の栗原小巻さん。りりしく自由で哀しい人生。今の日本を考えた。  
(女性)

▼久しぶりに、緊張感のある芝居を観ることができました。いつの時代も、同質の問題が存在するのですね。よりよい時代を目ざして！  
(女性)

▼裁く側の苦悩がせまつて来て二時間が短く感じた。その中で、新日本婦人の会の女性の登場がさわやかだった。  
(女性)

▼(冤罪、でつちあげという厄介な問題はさておき)男性陣出演者の「口角泡を飛

ばさん」ばかりに熱演する気持ちばかりです。しかし(勿論、役柄にもよりませんが)菅野須賀子や検事総長、元老の様な淡々した演技の方が観ている者の心に響きます。  
(男性)

▼じっくり味わうことが出来た舞台。権力側から「大逆事件」が取りあげられ、しかし只一人の女性被告菅野須賀子の生き方にもスポットがあたるとは!!原作、演出家の力量に熱い拍手を送ります。  
(女性)

▼久々にお芝居を観たといった気分になりました。百十年前いえずし前までもこの様な理不尽な裁判があったのだと思います。劇中、自由って何ですかの問いに菅野須賀子が、人間一人一人が、自分の顔を持ち、



自分の名前を持ち、何に依存することもなく、自分の足で立ち、自分の頭で考え、自分の口で話すということ。このセリフに自分とは振り返っていました。コナ禍でなければもつと沢山の人の観てほしいお芝居でした。ただ、俳優さん達の声が大きいので少しピツ

クリと、後部より照明の光が右より当たり煩わしかったが、良いお芝居だったと思う。  
(女性)

▼大逆事件を裁く側から捉えたことで、個人の良心だけではどうすることもできない、権力の持つている本質が見事に演じられていた。それは一人ひとりの役者がその役に乗り移ったのではないかと思えるような質の高い演技の成せる業であると思う。この芝居を観て感じるのは、百十年経っても権力の持つている本質は何も変わっていないことである。逆にここ数年は、内閣(行政府)による解釈改憲による憲法の形骸化等、三権分立をも踏みじめる権力むき出しの言動がまかり通っている現実である。まさに行政府の独裁とさえ言える異

常さである。今、人権は本当に守られているのだろうか。私たちは自分の肩の上ののっている頭で考えなければならぬ。この芝居が問いかけていることは何かを。この芝居は会場で観るだけでは終わらせてはいけないと思う。自分に引き寄せて考える第二幕目がとても大切ではないかと。  
(男性)

▼女優のセリフを聞いて久しぶりに美しい日本語に出会えた感動がありました。日本語とはかくあるべし。  
(女性)

【年代・性別不明】  
▼堀奈津美さんのきげんとした演技が芝居全体をしめていた。どの俳優も一九一年をしつかり自分のものとしている。

編集スタッフから  
いろいろな人のいろいろな人生を生舞台で追体験できる。芝居の面白さ・醍醐味はそこにあると思います。芝居という存在をもつと身近に感じても良いのではないかと常々考えています。だって、観た人それぞれが、自分自身に紐づけて、その人だけの何かを得たり感じたりしているわけですから。そんなみなさんの思いが、劇評集の中で縦横無尽に展開される。それって、素敵なことだと思います。ぜひみなさんのいろいろな思いを投稿してください。